

<研究ノート>

「幼児・児童のための古典読本」の構想

—キリスト教主義の学校園において—

古 田 雅 憲

A Study on “Classical Japanese Handbook for Children”

—At the Case of Christian Kindergarten or Primary School—

Masanori Furuta

【はじめに】

古典暗誦の教育的効用はつとに説かれたところであり、幼児や児童に供するための“素材集”の類もまた様々に提案され公刊されている。それらを用いて「しのたまわく、まなんどきに」、「ぎおんしょうじゃのかねのこえ」、「てんはひとのうえにひとをつくらず」などと元気いっぱい朗誦している子供たちの姿も、昨今また容易に思い浮かべることができる。

もちろん一方に「ただやみくもに暗誦しても……」との指摘もあり、それはそれでもっともながら、大勢の声が響きあうなかで古い日本語表現の口調、音や響きをじかに体感する経験は、子供に限らずまた誰にとっても大切な学びの一コマだとは言えるのだろう。

もっとも論者もまたやみくもな暗誦に躊躇する一人ではあって*1、なるべくなら内容理解（その“大体”であっても）を伴う暗誦を行いたい、そのためにも子供の生活に即した暗誦・音読用のテキストを用意したいとの願いを持っている——そのような者には、たとえばキリスト教主義の教育を旨とする学校園においては『文語訳聖書』（日本聖書教会刊『舊新約聖書』）が恰好の素材となるように思われる。（ただし、子供たちが臨む日々の礼拝や「宗教」の学習においては『新共同訳聖書』が用いられているから、彼等が『文語訳聖書』に接

する日常的な機会は意識的に設けようとしない限り、まずない。)◇ ◇

さて論者の現任校と関わりの深い私立S小学校もキリスト教に基づく教育を旨とする学校だが、そこでは毎月、子供たちに宛てて“月の聖句”が掲げられる——それには『新共同訳聖書』から当該月の学校行事や宗教行事にゆかりのある言葉が選ばれている。

子供たちは、その言葉を文字としてひと月の間に幾度となく目にし、また折々に美しく詠み上げてくださる先生方の声を耳にし、さらには自ら声を発して音読したりするうちに、その聖句を（子供によってはその前後の一節とともに）実に容易に暗誦するようにもなるのだ。

それと同時にその意味内容（の大体）も、その時々語られる先生方のお話を通じて、子供たち自身の生活に即して易しく具体的に解き明かされる。そのような日々のなかで子供たちは“音と意味の両面から”聖書の言葉に親しみ、それぞれの発達段階に応じて自らの内的世界を静かに豊かに紡いでいるのである。各月の聖句を通じて聖書の言葉は、まさしく“S小の学びの根幹”をなすところとして子供たちにふり注がれている。

このような学びの姿はなにもS小の子供たちに限ったものではあるまい。それは、キリスト教に基づく教育や保育を旨とする学校園に学び暮らす多くの子供たちの姿でもあるに違いない。

そのうえで『文語訳聖書』のこと——そのような子供たちの姿を思えばこそ、彼等が日頃から親しんでいる“月の聖句”（と前後の一節）12ヶ月分について、その『文語訳聖書』における当該12箇所を“古典読本”として編み、それを教師や友達と一緒に音読・暗誦するような機会を設けたいと願うのだ。それを通じて子供たちはきっと、『文語訳聖書』の湛える古い日本語表現（以下には単に「文語表現」と言う）を“音と意味の両面から”堪能するようになるだろう。上に言う「キリスト教主義の教育を旨とする学校園においては『文語訳聖書』が恰好の素材となる」とはその謂いである。◇ ◇

ここで『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』を確認して

おこう。

それは「(3) 我が国の言語文化に関する事項」のうち「伝統的な言語文化」の項目で、「ア 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章を音読するなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと」と掲げ、そのための素材について解説して「児童が、言葉のリズムを実感しながら読めるもの、音読することによって内容の大体を知ることができるような親しみやすい範囲のもの」と言い、特に「唱歌や文語調の校歌、各地域に縁のある作品など、児童にとって親しみやすいものを教材にすることも考えられる」とも言う。(『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編』126-127頁。なお下線は論者が私に施した、以下も同様。)

となれば、いくつかの「唱歌」がそれに縁ある地域に暮らす子供たちにとって「親しみやすいもの」であり、また「文語調の校歌」を有する学校に通う子供たちにとってその校歌がやはりそうであるように、キリスト教に基づく教育を旨とする小学校に学び暮らす児童たちにとって『文語訳聖書』は、まさに「親しみやすい」「近代以降の文語調の文章」として恰好の学習材と言うべきである。それを以て「言葉の響きやリズムに親し」み、また「音読することによって内容の大体を知る」言語活動を実践するならば、それもまた「伝統的な言語文化」を体得するための立派な国語実践であろう。



併せて『幼稚園教育要領解説(平成30年2月)』も確認しておこう。

それは「第2章 ねらい及び内容」の「第2節 各領域に示す事項」に「4 言葉の獲得に関する領域『言葉』として「(7) 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く」と掲げ、次のように解説している。

言葉はただ単に、意味や内容を伝えるだけのものではない。声として発せられた音声の響きやリズムには、音としての楽しさや美しさがある。

例えば、「ゴロゴロ ゴロゴロ」というように言葉の音を繰り返すリズムの楽しさや「ウントコショ ドッコイショ」というように言葉の音の響きの楽しさなどもある。また「サラサラ サラサラ」というように言葉の音の響きの美しさもある。言葉を覚えていく幼児期は、このような言葉の

音がもつ楽しさや美しさに気付くようになる時期でもある。

幼児は、幼稚園生活において絵本や物語などの話や詩などの言葉を聞く中で、楽しい言葉や美しい言葉に出会うこともある。教師や友達が言葉を楽しそうに使用している場面に出会い、自分でも同じような言い方をし、口ずさむことでその楽しさを共有することもある。また、教師の話す言葉に耳を傾けることにより、言葉の響きや内容に美しさを感じ、改めて言葉の世界の魅力に惹かれることもある。

(『幼稚園教育要領解説(平成30年2月)』211頁)

また「内容の取り扱い」として「(4) 幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、此等を使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、ことば遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。」と掲げ、次のように解説している。

また、絵本や物語、紙芝居の読み聞かせなどを通して、お話の世界を楽しみつつ、いろいろな言葉に親しめるようにすることも重要である。

特に語り継がれている作品は、美しい言葉や韻を踏んだ言い回しなど幼児に出会わせたい言葉が使われていることが多い。繰り返しの言葉が出てきて、友達と一緒に声を出して楽しめるものもある。お話の世界を通していろいろな言葉と出会い親しむ中で、自然に言葉を獲得していく。

言葉を獲得する時期である幼児期にこそ、絵本や物語、紙芝居などを通して、美しい言葉に触れ、豊かな表現や想像する楽しさを味わうようにしたい。
(『幼稚園教育要領解説(平成30年2月)』219頁)

となれば、昔話や神話と同様に「語り継がれている作品」として「美しい言葉や韻を踏んだ言い回しなど幼児に出会わせたい言葉が使われていることが多い」という点で『文語訳聖書』は、キリスト教に基づく教育を旨とする保育所や幼稚園に学び暮らす幼児たちにとっては、まさに「絵本や物語などの話や詩などの言葉」と同様に「生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く」ための恰好の素材と言うべきである。それを以て「音としての楽しさや美しさ」を友達

と一緒に体感し、「教師の話す言葉に耳を傾けることにより、言葉の響きや内容に美しさを感じ、改めて言葉の世界の魅力に惹かれ」たりしながら、「自然に言葉を獲得していく」ことができるならば、それもまた幼児たちが「伝え合う喜びを味わう」ための立派な支援であろう。



このように『文語訳聖書』は、特にキリスト教に基づく教育を旨とする学校園に学び暮らす子供たちのためには、小学校における国語教育の一つとして、また幼児期における言語獲得のための支援の一つとして、とても有意義な学習材と捉えることができる。その『文語訳聖書』に拠って“幼児・児童のための古典読本”を編み、それが湛える文語表現を教師や友達と一緒に音読したり暗誦したりする機会を設け、それらの言語活動を通して文章の「内容の大体を知る」とともに文語表現の持つ「独特のリズムや美しい語調」の「美しさや楽しさを実感的に味わうこと」を達成したい——それが小稿の提案するところである。

【『文語訳聖書』の言葉】

さて『文語訳聖書』に拠って“幼児・児童のための古典読本”を編んだとして、それを通じて子供たちはどのような質の文語表現に出会うのか。

その確認のため、まず一例として私立S小学校で掲げられた“2017年度4月の聖句”（とその前後）を掲げ、それに対応する『文語訳聖書』の一節と照らし合わせてみよう*2。

4月の聖句：「神は愛です。」（ヨハネの手紙一、第4章16節）

4 (15) イエスが神の子であることを公に言い表す人はだれでも、神がその人の内にとどまってくださり、その人も神の内にとどまります。(16) わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。(17) こうして、愛がわたしたちの内うちに全うまっとうされているので、裁きの日に確信を持つことができます。この世でわたしたちも、イエスの

ようであるからです。(18) 愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します。なぜなら、恐れは罰を伴い、恐れる者には愛が全うされていないからです。(19) わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださいましたからです。
(新共同訳聖書 ヨハネの手紙一、第4章15-19節)

4月の聖句：「神は愛なり。」(ヨハネの第一の書、第4章16節)

4 (15) おほよそイエスを神の子と言ひ表す者は、神かれに居り、かれ神に居る。(16) われらに対する神の愛をわれら既に知り、かつ信ず。神は愛なり、愛に居る者は神に居り、神もまたかれに居たまふ。(17) かくわれらの愛完全をえて、審判の日に懼れなからしむ。われらこの世にありて主のごとくなるによる。(18) 愛には懼れなし、全き愛は懼れを除く、懼れには苦難あればなり。懼るる者は、愛いまだ全からず。(19) われらの愛するは、神まづわれらを愛したまふによる。

(文語訳聖書 ヨハネの第一の書、第4章15-19節)

一読、全体としてはいかにも近代文語文らしい“和漢混淆の文体”を備えていることが分かる。以下、この一節の湛える“古典らしさ”を醸成する文語表現について文中に現れる順に取り上げ、その具体的な様相を整理してみたい。(以下、『文語訳聖書』『新共同訳聖書』について便宜的に、それぞれ「文語訳」「新共同訳」と言う。)



①「神は愛なり。」(聖句)について

ここに用いられる「なり」は助動詞(断定)の終止形。今日の日常会話のなかでは用いられることのない“文語表現に独特なもの”で、いかにも“古典らしさ”を強く感じさせる一語である。(もちろん“現代”を描くドラマやアニメまた小説や映画などでも意図的場面的に用いられることはある。)

その意味内容については、構文上の形態が今日普通に用いられる「…だ、…である、…です」とそのまま照応するから誰しも直観的に理解できるだろう——日頃から「新共同訳」の聖句「神は愛です。」に親しんでいればまして。

そのような子供たちにとってこの聖句「神は愛なり。」は、“意味の大体を捉えると同時に文語表現の口調、音や響きを楽しむ”のみに実に適している。その一節を日々口ずさむうちに、もしや「次は算数なり」「本日は晴天なり」などと口にする子供が現れるなら実に喜ばしい。



また「なり」は続く18節「愛には懼れなし、全き愛は懼れを除く、懼れには苦難あればなり。」のなかでも用いられている（終止形）。

こちらは“原因理由を表す確定条件句”（活用言の已然形+接続助詞「ば」）に下接して「苦難があるからだ」の意味を表すもの。これは先の「神は愛なり。」よりも複雑な表現形式である分、その意味内容を直観的に理解するのは難しい——またこの「あれば」が今日普通に用いられる「○○があれば良いなあ」などの仮定表現と紛れることもあって余計に。この点、日頃から「新共同訳」の「なぜなら、恐れは罰を伴い、恐れる者には愛が全うされていないからです。」の一節に親しんでいたとしても意味理解には難渋するだろう。

が、そうであっても、この「苦難あればなり」の表現は“口調、音や響きを楽しむ”のみに適した文語表現として積極的に価値づけたい。

と言うのも——

こころ まづ もの さいはひ てんごく すなは そのひと もの なり かなし もの さいはひ
 心の貧しき者は福なり天国は即ち其人の有なれば也。哀む者は福なり
 そのひと なくさめ う なり
 其人は安慰を得べければ也。

これは『明治元訳新約聖書（明治14年版）』の「馬太傳福音書第5章3-4節」——有名な“山上の垂訓”の冒頭部分である。以下、10節まで8回にわたって繰り返されるこの「…ればなり」のフレーズは、まさしく「文語訳」の湛える文語表現の厳かで美しい口調や響きを体現するものに違いない。今日通用の「文語訳」には省かれた*₃が、ぜひ子供たちと一緒に口ずさむ機会を設けたいと思うような一節である。先の「苦難あればなり」の文語表現もまたそれに通じるものとして、意味理解はさておいても取り上げて、その口調、音や響きを楽しみたい。

小稿末に私立S小学校の“2017年度 月の聖句”に対応する「文語訳」の

言葉を（その前後とともに）掲げて、「文語訳聖書による“月の聖句”一覧」とした（以下には「一覧」と言う）。そのなかで助動詞（断定）の「なり」は、未然形・連用形・終止形・連体形の各活用形にわたって20件の用例が見出される*4。「文語訳」にはポピュラーな表現である。

②「おほよそイエスを神の子と言ひ表す者は」（15節）について

ここに用いられる「おほよそ」は副詞。

辞書の類には、たとえば「犯人の一の見当はついている」「一の見通し」「事件の一がわかった」など名詞的に、また「駅から五百メートル」「一人間として生まれた以上、…」「政治とは一縁がない」など副詞的に用いると言う（三省堂『大辞林』第三版など）。今日普通に用いられるという点で助動詞「なり」ほど“文語表現に独特なもの”とは言えないけれども、それでも同義表現「だいたい」や「約」などが日常会話のなかでも多用されるのに比べれば文章語的で、その点でやはり“古典らしさ”を感じさせる一語ではある。

その意味内容はそれなりの知識を持った大人にとっても難解である。と言うのも、ここに用いられる「おほよそ」は「(それが) 特別ではないこと、一般的であること」を示唆するもので、それは今日普通に用いられる意味用法とはだいぶ違うからだ——なるほど「新共同訳」で「イエスが神の子であることを公に言い表す人はだれでも、」と構文を大きく改めるのも道理。この点、日頃から「新共同訳」の「公に言い表す人はだれでも」との表現に親しんでいたとしても意味理解には難渋するだろう。子供たちとこの一節を暗誦・音読するならば、やはり“意味はさておき”といったところで行うことになるのだろう。（“音と意味と両面から”と願ったとしても、それを実現するのに適した文語表現ばかりではない。）



ところで「副詞」ということでは、後続の17節「かくわれらの愛完全をえて、審判の日に懼れなからしむ。」に用いられる「かく」もまた注目して良い。

辞書の類には、たとえば「一言う私は」「一のごとき惨状」「とにも一にも」「一も盛大な会を催していただき…」などと用いると言う（三省堂『大辞

林』第三版など)が、いずれもやや大仰で古めかしい慣用的な言い回しではある——これもまた今日の日常会話のなかで用いられることのない“文語表現に独特なもの”で、いかにも“古典らしさ”を強く感じさせる一語と言って良い。

その意味内容については、構文上の形態が今日普通に用いられる「こう…、このように…、これほど…」などとそのまま照応するから誰しも直観的に理解できるだろう——日頃から「新共同訳」の「こうして、愛がわたしたちの内に全うされているので、裁きの日に確信を持つことができます。」に親しんでいればまして。

そのような子供たちにとってこの「かくわれらの愛完全をえて、」の一節は、“意味の大体を捉えると同時に文語表現の口調、音や響きを楽しむ”のに実に適している。その一節を日々口ずさむうちに、もしや「かくいうほくは」「かくのごとき課題は」などと口にする子供が現れるなら実に喜ばしい。



小稿末に掲げた「一覽」のなかに副詞は24語が見出される*5。そのうち上の「おほよそ、かく」のほか「いまだ、つとに、なにか、なにぞ、よし」なども、ぜひ子供たちに出会わせたい文語表現である。

③「神かれに居り、かれ神に居る。」(15節)について

ここに用いられる「居り・居る」はラ行四段活用の動詞。もとラ行変格活用の動詞「をり」に由来する。

後者(終止形)の「居る」はラ変本来の活用に従って「かれ神にをり。」とあればいっそう文語表現らしいが、“はや江戸期には終止形も「おる」の形が一般的だった”とは日本語史の教えるところ。いずれにしても「いる」を専ら用いる今日の共通語話者にとっては“古典らしさ”を感じさせる一語である——もっとも西日本方言の話者にとっては、連用形の「居り」はもちろんのこと、終止形の「居る」もまた今日の日常生活のなかで用いる一語だから、これらを“文語表現に独特のもの”と感じない子供も多いかもしれない。

ちなみに「居」字は後続17節にも「愛に居る者は神に居り、神もまたかれに居たまふ。」と用いられている。その前半部分「愛に居る者は神に居り、」で

は「おる、おり」と訓み、後半部分「かれに居たまふ」では「い」と訓んで「おりたまう」と訓まない——当然のこと、子供たちには疑問も生じよう。

その点、辞書の類には「たとえば、『枕草子』では農民・下僕の類が「をり」の主語となっている。『源氏物語』でも隨身・使者など身分の低い人が主語となった例が多く見られ、比較的身分が高い人が主語となった場合でも、主語に対する非難や軽蔑の感情を伴っていることが指摘されている。」(文英堂『全訳全解古語辞典』など)と言う。要するに、平安朝以降に「をり」の待遇表現としての価値が低下したのだ。従って尊敬の意を表す「たまふ」とは、早い時期から一緒には用いられなくなった——などと言ったところで子供たちの理解は得られまい。ここは“通り過ぎる”しかない。



さてこの一節を音読すれば「7 + 7」のリズムが心地よい。格助詞「が」を省くことから生じる効果である。また一種対句的な構文もその「心地よさ」を支えている——いかにも“古典らしさ”を強く感じさせるところである。上掲「幼稚園教育要領解説（平成30年2月）」の219頁に「特に語り継がれている作品は、美しい言葉や韻を踏んだ言い回しなど幼児に出会わせたい言葉が使われていることが多い。」と言うのを思い出してよい。

一文の意味内容が比較的平易であるからには、この「神かれに居り、かれ神に居る。」の一節は、子供たちにとって“意味の大体を捉えると同時に文語表現の口調、音や響きを楽しむ”のに実に適している。後続16節の「愛に居る者は神に居り、神もまたかれに居たまふ。」や18節の「全き愛は懼れを除く、懼れには苦難あればなり。懼るる者は、愛いまだ全からず。」なども同様である。「新共同訳」の丁寧で分かりやすい表現——「愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。」や「完全な愛は恐れを締め出します。なぜなら、恐れは罰を伴い、恐れる者には愛が全うされていないからです。」——にはない、そのリズムの心地よさを子供たちと一緒に楽しみ味わいたい。

④「われらに対する神の愛をわれら既に知り、かつ信ず」(16節)について

ここに用いられる「信ず」はサ行変格活用の動詞（終止形）。今日普通に用いられる「信じる」とは活用語尾を異にする点で“文語表現に独特のもの”であり、いかにも“古典らしさ”を感じさせる一語である。

また“活用語尾を異にする”ということでは、後続 18 節「懼るる者は、愛いまだ全からず」に用いられる「懼るる」（下二段活用動詞の連体形）も同様——やはり“古典らしさ”を感じさせる一語である。

さらに同様の用例を小稿末に掲げた「一覧」のなかに求めれば、「愛す（サ変・終止形）」、「あり（ラ変・終止形）」、「出づる（下二段・連体形）」、「得る（同前）」、「畏るる（同前）」、「隠るる（同前）」、「試むる（同前）」、「す（サ変・終止形）」、「責むる（下二段・連体形）」、「援く（下二段・終止形）」、「立つる（下二段・連体形）」、「事ふる（同前）」、「告ぐ（下二段・終止形）」など*6。このような動詞活用語尾の違いもまた、“文語表現の口調、音や響きを楽しむのに適したもの”と言って良い。ぜひ子供たちと一緒に口ずさみたい。

⑤ 「かくわれらの愛完全をえて、審判の日に懼れなからしむ」（17 節）について

ここに用いられる「しむ」は助動詞（使役）の終止形。同義の文語表現「す・さす」が「せる・させる」の形で今日普通に用いられるのに対して、もと漢文訓読に由来する「しむ」は、今日では日常会話中にはもちろん文章語としても用いられることがない。その点で“文語表現に独特のもの”として“古典らしさ”をととても強く感じさせる一語である。

その点では子供たちにもぜひ出会わせたい文語表現だが、この一節は意味的に難解だ——「審判の日に懼れなからしむ」（審判の日に懼れなくいさせる）という表現は、それなりの知識を持った大人にとっても難しい。なるほど「新共同訳」で「裁きの日に確信を持つことができます」と構文・用語ともに大きく改めるのも道理。あえて「使役」の意を用いずに済ますほどだ。この点、日頃から「新共同訳」の表現に親しんでいたとしても意味理解には難渋するだろう。子供たちとこの一節を暗誦・音読するならば、やはり“意味はさておき”といったところで行うことになるのだろう。

ちなみに小稿末に掲げた「一覧」のなかで助動詞（使役）の「しむ」は、連

用形・終止形・命令形の各活用形にわたって4件の用例が見出される。同義の「す・さす」がほとんど用いられないことがないこと（命令形の1件が見えるばかり）を思えば、やはり「文語訳」の特徴的な表現と言ってよいだろう*7。

⑥「われらこの世にありて主のごとくなるによる」（17節）について

ここに用いられる「ありて」はラ行変格（または四段）活用の動詞（連用形）に接続助詞「て」が下接したもの。今日普通に用いられる音便形「あって」ではなく非音便形が維持されている。このようなところもまた強く“古典らしさ”を感じさせる点だ。

同様の用例を小稿末に掲げた「一覧」のなかに求めれば、「ありて（ラ変）」「売りて（ラ行四段）」「聞きて（カ行四段）」「来たりて（ラ行四段）」「高ぶりたる（ラ行四段）」「轟きて（カ行四段）」「望みて（マ行四段）」「向かひて（ハ行四段）」「^ゆ往きて（カ行四段）」「よりて（ラ行四段）」「喜びて（バ行四段）」など11語13件が見出される**。その一方で音便形は見出されない。



これに関連して形容詞（終止・連体形）についても、今日普通に用いられるイ音便形ではなく非音便形が維持されている。このようなところもやはり強く“古典らしさ”を感じさせる点だ。

その用例を小稿末に掲げた「一覧」のなかに求めれば、「難し。」「聡し。」「なし。」「易し。」「（以上、終止形）や「卑しき…」「親き^{ちか}…」「乏しき…」「深き…」「貧しき…」「善き…」「弱き…」（以上、連体形）など11語15件が見出される*9。

これら動詞（連用形）・形容詞（終止・連体形）の非音便形は、日常生活のなかで音便形を専ら用いる子供たちにとっては新鮮なもの——やはり“文語表現の口調、音や響きを楽しむ”のに適したものと言って良い。ぜひ子供たちと一緒に口ずさみたい。もしや「かく難しき算数の問題はなし、だよ」「おいしき給食と聞きて来たぞ」などと口のできる子供が現れるなら実に喜ばしい。

なお形容詞（連用形）のウ音便については、それが現れる環境じたいが「一覧」のなかには次の一例のみ。そこではウ音便形が用いられている——「相互ひに心を同じうし、高ぶりたる思いをなさず、反って卑きに付け。」ロマ

12-16 (10月)。

形容詞のウ音便形は、いくつかの慣用句を除いてこれを用いない今日の共通語話者にとっては、やはり“古典らしさ”を感じさせる一語ではある——もともと西日本方言の話者にとっては今日の日常生活のなかで用いる一語だから、これらを文語表現と感ぜない子供もいるかしのれない。

⑦「われらこの世にありて主のごとくなるによる」(17節)について

ここに用いられる「ごとくなる」は助動詞(比況)の連体形。(また助動詞「ごとし」の連用形「ごとく」とも。)同義の文語表現「やうなり」が「…のようだ、ように、ような」の形で今日普通に用いられるのに対して、もと漢文訓読に由来する「ごとし」は今日普通に用いられない一語である。その点で“文語表現に独特のもの”として“古典らしさ”をととても強く感ぜさせる一語である。

その意味内容については、構文上の形態が今日普通に用いられる「…のようである、…のようだ、…のようです」とそのまま照応するから誰しも直観的に理解できるだろう——日頃から「新共同訳」の「この世でわたしたちも、イエスのようであるからです。」に親しんでいればまして。

また福岡市方言では「…ノゴタル、…ノゴター」などの形で「ごとし」を現在でも用いるから、自身の使用語彙ではないにしても、その一語をそのまま理解できる子供たちも少なからずいるに違いない。あるいは文語表現と感ぜない子供もいるかしのれない。

ともあれこの一節は子供たちにとっても、まさしく“意味の大体を捉えると同時に文語表現の口調、音や響きを楽しむ”のに実に適している。

⑧「懼るる者は、愛いまだ全からず。」(18節)について

ここに用いられる「ず」は助動詞(打ち消し)の終止形。今日の日常会話のなかで用いられることのない“文語表現に独特なもの”で、いかにも“古典らしさ”を感じさせる一語である。

ただし、たとえば「宿題もせずに遊びに行く」「ご飯も食わずに頑張る」などと連用形としては今日普通に用いられるから、特に文語表現とも思わずに、

意味内容もそのまま直観的に理解してしまう人もいるだろう。むしろ形容詞「全し」の方が難解かもしれないが、日頃から「新共同訳」の「恐れる者には愛が全うされていないからです。」に親しんでいればさほど難しい一語ではあるまい。この一節もまた子供たちにとって、まさしく“意味の大体を捉えると同時に文語表現の口調、音や響きを楽しむ”のに実に適している。

⑨用字法について

「文語訳」の“漢字の宛て方”には面白いところがある——これについては暗誦・音読の実践と直接的には関係しないし、またことさら文語表現に特徴的ということでもないが、ここで付言しておきたい。

それらを小稿末に掲げた「一覧」のなかから示せば、「虚偽」^{いつわり} ロマ 12-9 (10月)、「至上者」^{いとたかきもの} 詩篇 46-4 (2月)、「生命」^{いのち} マタイ 19-16、マタイ 19-17、「誠命」^{いましめ} マタイ 19-17 (以上5月)、「行為」^{おこない} マタイ 5-16 (8月)、「畏懼」^{おそれ} 詩篇 34-4 (6月)、「各人」^{おののお} ペテロ 4-10 (3月)、「落胆」^{おち} テサ 5-14 (11月)、「審判」^{さばき} ヨハネ 4-17 (4月)、「財宝」^{たから} マタイ 19-21 (5月)、「戦闘」^{たたかい} イザヤ 2-4 (7月)、「能力」^{ちから} ペテロ 4-11、「権力」^{ちから} ペテロ 4-11 (以上3月)、「使者」^{つかい} 詩篇 34-7 (6月)、「永遠」^{とこしえ} マタイ 19-16 (5月)、イザヤ 9-6 (12月)、「灯火」^{ともしび} マタイ 5-15、マタイ 5-15 (以上8月)、「俘囚」^{とらわれびと} 詩篇 126-4 (9月)、「患難」^{なやみ} 詩篇 34-6 (6月)、ロマ 12-12 (10月)、「完全」^{まつたき} ヨハネ 4-17 (4月)、「政事」^{まつりごと} イザヤ 9-6、「嬰兒」^{みどりこ} イザヤ 9-6 (以上12月)、「恩恵」^{めぐみ} 詩篇 34-8 (6月)、ペテロ 4-10 (3月)、「所有」^{もちもの} マタイ 19-21 (5月)、「中央」^{もなか} 詩篇 46-2 (2月)、「歓喜」^{よろこび} 詩篇 126-5 (9月) など。

いかにも近代文語文らしい“和漢混淆の文体”のなかでは、これらの言葉は「虚偽、至上、生命、誠命、行為、畏懼、各人、落胆、審判、財宝、戦闘、能力、権力、使者、永遠、灯火、俘囚、患難、完全、政事(政治)、嬰兒、恩恵、所有、中央、歓喜」などと“漢語”として訓まれる方がむしろ自然のはずだが、あえて“和訓”が与えられている点が興味深い——このような表現の存在は「文語訳」が、音読・朗誦を通じて人々の理解に供しようとの意図のもと、言わば“耳に馴染む一書”として編まれたことの証左であろう。

となれば、やはり『文語訳聖書』を子供たちと一緒に口ずさみ、その文語表現の持つ「独特のリズムや美しい語調」の「美しさや楽しさを感じ覚的に味わうこと」は、その編訳者たちの願いにもまたかなう営みのだろうと思う。

【「文語訳聖書による“月の聖句”一覧】

以下に、私立S小学校の“2017年度 月の聖句”に対応させて編んだ「文語訳聖書による“月の聖句”一覧」を掲げる*10。

○4月の聖句；「神は愛です。」ヨハネの手紙一、第4章16節

○4月の聖句；「神は愛なり。」ヨハネの第一の書、第4章16節

4 (15) おほよそイエスを神の子と言ひ表す者は、神かれに居り、かれ神に居る。(16) われらに対する神の愛をわれら既に知り、かつ信ず。神は愛なり、愛に居る者は神に居り、神もまたかれに居たまふ。(17) かくわれらの愛完全をえて、審判の日に懼れなからしむ。われらこの世にありて主のごとくなるによる。(18) 愛には懼れなし、全き愛は懼れを除く、懼れには苦難あればなり。懼るる者は、愛いまだ全からず。(19) われらの愛するは、神まづわれらを愛したまふによる。

(文語訳聖書「ヨハネの第一の書」第4章15-19節)

○5月の聖句；「父母を敬え、また、隣人を自分のように愛しなさい。」

(「マタイによる福音書」第19章19節)

○5月の聖句；「父と母とを敬へ、また己のごとくなんぢの隣を愛すべし。」
(「マタイ伝福音書」第19章19節)

19 (16) 見よ、ある人御許に來たりて言ふ、「師よ、われ永遠の生命を得るためには、いかなる善き事をなすべきか。」(17) イエス言ひたまふ、「善き事につきて何ぞわれに問ふか、善き者はただひとりのみ。なんぢもし生命に入らんと思はば誠命を守れ。」(18) かれ言ふ、「いづれを。」イエス言ひたま

う ころ かんいん ぬす ぎしやう た
 夫、「殺すなかれ、姦淫するなかれ、盗むなかれ、偽証を立つるなかれ、(19)
 父と母とを敬へ、また己のごとくなんぢの隣を愛すべし。」(20) その若者
 い う まも な お なに か かい いた まう
 言ふ、「われみなこれを守れり、なほ何を欠くか。」(21) イエス言ひたまふ、
 な ん じ まつた おも わ ゆ なん じ もちもの う まず もの
 「なんぢもし全からんと思はば、往きてなんぢの所有を売りて貧しき者に
 ほどこ たから てん え かつ き したが え
 施せ、さらば財宝を天に得ん。かつ来たりてわれに従へ。」(22) この言を
 き わかものかな さ おおい しさん も ゆ え
 聞きて、若者悲しみつつ去りぬ。大なる資産を持つてゆゑなり。(23) イエス
 で し い た まう なん じ つつ もの てんこく い
 弟子たちに言ひたまふ、「まことになんぢらに告ぐ、富める者の天国に入
 るは難し。(24) またなんぢらに告ぐ、富める者の神の国に入るよりは、駱駝
 はり あな とお かつかえ やす
 の針の孔を通る方反つて易し。」

(文語訳聖書「マタイ伝福音書」第19章16-24節)

○6月の聖句：「味わい見よ、主の恵み深さを。」(「詩編」第34篇9節)

○6月の聖句：「なんぢらエホバの恩恵深きを嘗ひ知れ。」

(「詩篇」第34篇8節)

34 (4) われエホバを尋ねたればエホバわれに応へ、我を諸々の畏懼より助
 え ほ ぼ たず え ほ ぼ われ こたえ われ もろもろ おそれ
 け出だしたまへり。(5) かれらエホバを仰ぎ望みて光を被れり。かれらの面
 い た ま え え ほ ぼ あお のぞ ひかり こうぶ かお
 は恥ぢ赤らむことなし。(6) この苦しむ者叫びたればエホバこれを聞き、そ
 は じ あか くる ものさけ え ほ ぼ き
 のすべての患難より救い出だしたまへり。(7) エホバの使者はエホバを畏
 もの まわり えい つら たす なん じ え ほ ぼ めぐみふか あじわ
 る者のまはりに営を連ねてこれを援く。(8) なんぢらエホバの恩恵深きを嘗
 い し え ほ ぼ たの さいわい え ほ ぼ せいと え ほ ぼ おそ
 ひ知れ。エホバにより恃む者は幸ひなり。(9) エホバの聖徒よ、エホバを畏
 れよ。エホバを畏るる者には乏しきことなければなり。

(文語訳聖書「詩篇」第34篇4-9節)

○7月の聖句：「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。」
 (「イザヤ書」第2章4節)

○7月の聖句：「かれらはその剣を打ち換えて鋤となし、その鎗を打ち換えて鎌となす。」(「以賽亞書」第2章4節)

2 (4) エホバは諸々の国の間を裁き、多くの民を責めたまはん。かくてかれらはその剣を打ち換へて鋤となし、その鎗を打ち換へて鎌となし、国は国に向かひて剣を上げず、戦闘のことを再び学ばざるべし。(5) ヤコブの家よ来たれ、われらエホバの光に歩まん。
 (文語訳聖書「以賽亞書」第2章4-5節)

○8月の聖句：「あなたがたは地の塩である。」
 (「マタイによる福音書」第5章13節)

○8月の聖句：「なんぢらは地の塩なり。」
 (「マタイ伝福音書」第5章13節)

5 (13) なんぢらは地の塩なり、塩もし効力を失はば、何をもてかこれに塩すべき。後は用なし、外に捨てられて人に踏まるのみ。(14) なんぢらは世の光なり。山の上にある町は隠ることなし。(15) また人は灯火を灯して升の下に置かず、灯台の上に置く。かくて灯火は家にあるすべての物を照すなり。(16) かくのごとくなんぢらの光を人の前に輝かせ。これ人のなんぢらが善き行為を見て、天にいますなんぢらの父を崇めんためなり。
 (文語訳聖書「マタイ伝福音書」第5章13-16節)

○9月の聖句；「涙と共に種を蒔く人は、喜びの歌と共に刈り入れる。」

(「詩編」第126篇5節)

○9月の聖句；「涙とともに播く者は歡喜とともに穫らん。」

(「詩篇」第126篇5節)

126 (4) エホバよ、願くはわれらの俘囚を南の川のごとくに帰したまへ。(5)
 涙とともに播く者は歡喜とともに穫らん。(6) その人は種を携へ、涙を流
 して出で行けど、木束を携へ、喜びて帰り来たらん。

(文語訳聖書「詩篇」第126篇4-6節)

○10月の聖句；「希望を持って喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。」

(「ローマの信徒への手紙」第12章12節)

○10月の聖句；「望みて喜び、患難に耐へ、祈りを恒にせよ。」

(「ローマ人への書」第12章12節)

12 (9) 愛には虚偽あざれ。悪は憎み、善は親しみ、(10) 兄弟の愛をもて互
 ひに愛しみ、礼儀をもて相譲り、(11) 勤めて怠らず、心を熱くし、主に仕
 え、(12) 望みて喜び、患難に耐へ、祈りを恒にし、(13) 聖徒の欠乏を賑し、旅
 人を懇ろに待せ。(14) なんぢらを責むる者を祝し、これを祝して詛ふな。(15)
 喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣け。(16) 相互ひに心を同じうし、高ぶ
 りたる思いをなさず、反って卑きに付け。なんぢら己を聡しとすな。(17) 悪
 をもて悪に報いず、すべての人の前に善からんことを図り、(18) なんぢらの
 為し得るかぎり力めて、すべての人と相和げ。

(文語訳聖書「ローマ人への書」第12章9-18節)

○ 11月の聖句：「どんなことにも感謝しなさい。」

(「テサロニケの信徒への手紙一」第5章18節)

○ 11月の聖句：「すべてのことを感謝せよ。」

(「テサロニケ人への前の書」第5章18節)

5 (14) 兄弟よ、なんぢらに勧む、妄なる者を訓戒し、落胆せし者を励まし、弱き者を扶け、すべての人に対して寛容なれ。(15) 誰も人に対し悪をもて悪に報いぬよう慎め。ただ相互ひに、またすべての人に対して常に善を追い求めよ。(16) 常に喜び、(17) 絶えず祈れ、(18) すべてのことを感謝せよ、これキリスト・イエスによりて神のなんぢらに求めたまふところなり。

(文語訳聖書「テサロニケ人への前の書」第5章14-18節)

○ 12月の聖句：「ひとりの嬰兒が私たちのために生まれた、ひとりの男の子が私たちに与えられた。」(「イザヤ書」第9章5節)

○ 12月の聖句：「ひとりの嬰兒、われらのために生まれたり。われらはひとりの子を与えられたり。」(「以賽亞書」第9章6節)

9 (6) ひとりの嬰兒、われらのために生まれたり。われらはひとりの子を与えられたり。政事はその肩にあり。その名は「奇妙また議士また大能の神、永遠の父、平和の君」と称へられん。

(文語訳聖書「以賽亞書」第9章6節)

- 1月の聖句：「人はパンだけで生きるものではない、神の口から出る、一つ一つの言葉で生きる。」（「マタイによる福音書」第4章4節）

○1月の聖句：「人の生くるはパンのみによるにあらず、神の口より出づるすべての言による」（「マタイ伝福音書」第4章4節）

4 (1) ここにイエス御霊によりて荒野に導かれたたまふ。悪魔に試みられんとするなり。(2) 四十日四十夜断食して、後に飢ゑたまふ。(3) 試むる者来たりて言ふ。「なんぢもし神の子ならば、命じてこれらの石をパンとならしめよ。」(4) 答へて言ひたまふ。「『人の生くるはパンのみによるにあらず、神の口より出づるすべての言による』と録されたり。」

(文語訳聖書「マタイ伝福音書」第4章1-4節)

- 2月の聖句：「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。」（「詩編」第46篇2節）

○2月の聖句：「神はわれらの避所また力なり。悩めるときの最も親き助けなり。」（「詩篇」第46篇1節）

46 (1) 神はわれらの避所また力なり。悩めるときの最も親き助けなり。(2) されば、たとひ地は変はり山は海の中央に遷るとも、われらは懼れじ。(3) よしその水は鳴り轟きて騒ぐとも、その溢れ来たるによりて山は揺るぐとも、何かあらん。(4) 河あり。その流れは神の都を喜ばしめ、至上者の住みたまふ聖所を喜ばしむ。(5) 神その中にいませば都は動かじ。神は朝つとにこれを助けたまはん。

(文語訳聖書「詩篇」第46篇1-5節)

○3月の聖句：「心をこめて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うからです。」
 (「ペトロの手紙一」第4章8節)

○3月の聖句：「何事よりもまづ互ひに熱く相愛せよ。愛は多くの罪を掩へばなり。」(「ペテロの前の書」第4章8節)

4 (8) 何事よりもまづ互ひに熱く相愛せよ。愛は多くの罪を掩へばなり。(9)
 また吝むことなく互ひに懇ろに待せ。(10) 神のさまざまの恩恵を掌どる善き
 家司のごとく、各人その受けし賜物をもて互ひに事へよ。(11) もし語るな
 らば、神の言を語る者のごとく語り、事ふるならば、神の与へたまふ能力
 を受けたる者のごとく事へよ。これイエス・キリストによりて事々に神の
 崇められたまはん為なり。栄光と権力とは世々限りなくかれに帰するな
 り。アアメン。
 (文語訳聖書「ペテロの前の書」第4章8-11節)

これら「文語訳聖書による“月の聖句”」を各頁ごとに配し、冒頭頁には下
 記のような「このハンドブックの使い方」を掲げたい。

—このハンドブックの使い方—

○毎月の聖句を「文語訳聖書」で暗誦してみましよう。

※口の形や姿勢に気をつけて、大きな声で暗誦してみましよう。

※先生が読んでくださるのをまねして読んでみましよう。

○聖句が含まれている箇所を「文語訳聖書」で音読してみましよう。

※語のまとまりに気をつけながら、古文の響きやリズムを楽しんで。

※日頃のチャペルで学んだ事を思い出しながら、全体の構成や文章に
 込められた書き手の心情に思いを馳せて。

※自分の感じ方が聞き手に伝わるように工夫しながら。

【おわりに】

このように、キリスト教に基づく教育や保育を旨とする学校園に学び暮らす子供たちのために『文語訳聖書』に拠って“幼児・児童のための古典読本”を編み、それが湛える文語表現を教師や友達と一緒に音読したり暗誦したりする機会を設け、それらの言語活動を通して文章の「内容の大体を知る」とともに文語表現の持つ「独特のリズムや美しい語調」の「美しさを楽しさを感覚的に味わうこと」を達成しようというのである。実践に向けてはなお細かなところを整える必要もある、大方のご批評をお願いしたい。

【注】

* 1) たとえば「祇園精舎」をリズムに乗せて元気よく朗らかに暗誦する五年生たちの姿は、古い日本語表現の口調、音や響きを存分に楽しんでいる点で実に素晴らしい。ただし、そういう彼等に“平曲と琵琶法師のこと”を教唆したうえで「いちど立ち止まってほしい」とも思うのだ。「この祇園精舎の一節もそもそもは盲目の琵琶法師たちが謡い語り継いだものらしい」と知ってなお“朗らかで楽しい暗誦”しかイメージしない彼等であるなら、国語教師の一人としてはいささか物足りない思いがする——たとえば「目に光の届かぬ人々が“沙羅双樹の花の色”と謡った時、彼等は何を見たのか、その胸中に何を思ったのか、私たちみたくリズムよく朗らかに声に出せたのか」などと、少しくらいは立ち止まる彼等であってくれなくては。あるいは「もう元気い暗誦なんかできなくなったよ」とこぼす子供がいてほしいとさえ。その上で「さて私たちはこれをどんな風に声にしようか」と“考える音読・暗誦”を模索する子供たちの姿を期待したい。

* 2) 『文語訳聖書』のうち「旧約聖書」については『明治元訳聖書』(1887年)により、また「新約聖書」については『大正改訳聖書』(1917年)の本文に拠る。

これを掲げるにあたって下記の諸点に留意した。中・高学年児童はもとより低学年児童でもなるべく容易に音読できるようにするためである。むろん音読であれ暗誦であれ、それを行うにあたっては、子供の発達段階や個々の興味・意欲・関心など「学びに向かう力」の実態に応じて、聖句に限っても良いし前後箇所も含めても良い。またこれを保育所・幼稚園で過ごす幼児とともにする場合は、まず先生や保育士が適宜区切って朗誦し、それを追って子供たちが朗誦するという形になるだろう。

※子供の読誦に便宜を図るために、原文の歴史的かなづかいに現代かなづかいによるルビ(ひらがな)を付した。

※同様の意図から、原文の漢字に現代かなづかいによるルビ(ひらがな)を付し、また必要に応じて送りがなを補った。

※同様の意図から、原文の漢字を適宜ひらがな書きに改めた。

※子供の内容理解を促す便宜から旧漢字は現代通用字体に変えた。また難渋な用字（漢字）について簡明なものに変えた箇所がある。

※同様の便宜から、連続するかな書きについて適宜漢字を宛てた箇所がある。

※読誦及び内容理解の両面から句読点を適宜加え、また改めた。

- * 3) 今日通用の『文語訳聖書』の当該箇所は次のようになっている。大正期（1917）に施された改訂作業で生じた異同である。（現行『文語訳聖書』の「新約聖書」部分はその改訂を経た『大正改訳聖書』のもの。）

幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。幸福なるかな、悲しむ者。その人は慰められん。（さいはひなるかな、こころのまづしきもの。てんこくはそのひとのものなり。さいはひなるかな、かなしむもの、そのひとはなぐさめられん。）

大正期（1917）に施された改訳の際に『明治元訳（明治14年版）』の「…ればなり」は省かれてしまったが、一方で「さいわいなるかな」という美しいフレーズの反復（8回）が採用されている。いずれも文語表現の口調、音や響きを味わうのには恰好の素材である。

- * 4) ヨハネ 4-16・同 4-17・同 4-18（以上4月）、マタイ 19-22（5月）、詩篇 34-9（6月）、マタイ 5-13・同 5-14・同 5-15・同 5-16（以上8月）、詩篇 126-4（9月）、テサ 5-18（11月）、マタイ 4-1・同 4-3（以上1月）、詩篇 46-1・同 46-1（以上2月）、ペトロ 4-8・同 4-11・同 4-11・同 4-11・同 4-11（以上3月）
- * 5) あひたがひに；ロマ 12-16（10月）・テサ 5-15（11月）／いまだ；ヨハネ 4-18（4月）／おほよそ；ヨハネ 4-15（4月）／かく；ヨハネ 4-17（4月）・マタイ 5-15・マタイ 5-16（以上8月）／かへつて；マタイ 19-24（5月）・ロマ 12-16（10月）／すでに；ヨハネ 4-16（4月）／すべて；詩篇 34-6（6月）・マタイ 5-15（8月）・ロマ 12-17・ロマ 12-18（以上10月）・テサ 5-14・テサ 5-15・テサ 5-18（以上11月）・マタイ 4-4（1月）／たえず；テサ 5-17（11月）／たがひに；ペトロ 4-8・ペトロ 4-9・ペトロ 4-10（以上3月）・ロマ 12-10（10月）／ただ；マタイ 19-17（5月）・テサ 5-15（11月）／たとひ；詩篇 46-2（2月）／つとに；詩篇 46-5（2月）／ともに；詩篇 126-5・詩篇 126-5（以上9月）・ロマ 12-15・ロマ 12-15（以上10月）／なにか；詩篇 46-3（2月）／なにぞ；マタイ 19-17（5月）／なほ；マタイ 19-20（5月）／ふたたび；イザヤ 2-4（7月）／まことに；マタイ 19-23（5月）／また；ヨハネ 4-16（4月）・イザヤ 9-6・イザヤ 9-6（以上12月）・詩篇 46-1（2月）／まづ；ヨハネ 4-19（4月）・ペトロ 4-8（3月）／みな；マタイ 19-20（5月）／もし；マタイ 19-17・マタイ 19-21（以上5月）・マタイ 5-13（8月）・マタイ 4-3（1月）・ペトロ 4-11（3月）／もつとも；詩篇 46-1（2月）／よし；詩篇 46-3（2月）
- * 6) 「なんぢの隣を愛すべし。」マタイ 19-19（5月）、「政事はその肩にあり。」イザヤ 9-6（12月）、「河あり。」詩篇 46-4（2月）、「神の口より出づるすべての言による」マタイ 4-4（1月）、「なんぢらの為し得るかぎり力めて」ロマ 12-18（10月）、「エホバの使者はエホバを畏る者のまはりに」詩篇 34-7（6月）、「エホバを畏る者には乏しきことなればなり。」詩篇 34-9（6月）、「懼る者は、愛いまだ全からず。」ヨハネ 4-18（4月）、「山の上にある町は隠ることなし。」マタイ 5-14（8

- 月)、「試むる者来たりて言ふ。」マタイ 4-3 (1月)、「なんぢら己を隠しとすな。」ロマ 12-16 (10月)、「何をもてかこれに塩すべき。」マタイ 5-13 (8月)、「なんぢらを責むる者を祝し」ロマ 12-14 (10月)、「まはりに營を連ねてこれを援く。」詩篇 34-7 (6月)、「偽証を立つるなかれ」マタイ 19-18 (5月)、「事ふるならば、神の与へたまふ能力を受けたる者のごとく事へよ」ペトロ 4-11 (3月)、「まことになんぢらに告ぐ。」マタイ 19-23 (5月)、「またなんぢらに告ぐ。」マタイ 19-24 (5月) など。
- * 7) ヨハネ 4-17 (4月)、マタイ 4-3 (1月)、詩篇 46-4、同 46-4 (以上 2月)。一方「す・さす」はほとんど用いられることがなく、命令形の 1 件が見えるばかりである。「かくのごとくなんぢらの光を人の前に輝かせ。」マタイ 5-16 (8月)
- * 8) 「われらこの世にありて主のごとくなるによる。」ヨハネ 4-17 (4月)、「往きてなんぢの所有を売りにて貧しき者に施せ。」マタイ 19-21、「この言を聞いて、若者悲しみつつ去りぬ。」マタイ 19-22 (以上 5月)、「試むる者来たりて言ふ。」マタイ 4-3 (1月)、「相互ひに心を同じうし、高ぶりたる思いをなさず。」ロマ 12-16 (10月)、「よしその水は鳴り轟きて騒ぐとも。」詩篇 46-3 (2月)、「望みて喜び、患難に耐へ、祈りを恒にし。」ロマ 12-12 (10月)、「国は国に向かひて剣を上げず。」イザヤ 2-4 (7月)、「往きてなんぢの所有を売りにて貧しき者に施せ。」マタイ 19-21 (5月)、「ここにイエス御霊によりて荒野に導かれたまふ。」マタイ 4-1 (1月)、「その溢れ来たるによりて山は揺るぐとも。」詩篇 46-3 (2月)、「これイエス・キリストによりて事々に神の崇められたまはん為なり。」ペテロ 4-11 (3月)、「禾束を携へ、喜びて帰り来たらん。」詩篇 126-6 (9月)
- * 9) 「富める者の天国に入るは難し。」マタイ 19-23 (5月)、「なんぢら己を隠しとすな。」ロマ 12-16 (10月)、「かれらの面は恥ぢ赤らむことなし。」詩篇 34-5 (6月)、「塩もし効力を失はば、何をもてかこれに塩すべき。後は用なし。」マタイ 5-13、「山の上にある町は隠ることなし。」マタイ 5-14 (以上 8月)、「富める者の神の国に入るよりは、駱駝の針の孔を通る方反って易し。」マタイ 19-24 (5月)、「高ぶりたる思いをなさず、反って卑きに附け。」ロマ 12-16 (10月)、「悩めるときの最も親き助けなり。」詩篇 46-1 (2月)、「エホバを畏るる者には乏しきことなければなり。」詩篇 34-9、「なんぢらエホバの恩恵深きを嘗ひ知れ。」詩篇 34-8 (以上 6月)、「なんぢの所有を売りにて貧しき者に施せ。」マタイ 19-21、「いかなる善き事をなすべきか。」マタイ 19-16、「善き事につきて何ぞわれに問ふか、善き者はただひとりのみ。」マタイ 19-17 (以上 5月)、「これ人のなんぢらが善き行為を見て。」マタイ 5-16 (8月)、「神のさまたまの恩恵を掌どる善き家司のごとく。」ペテロ 4-10 (3月)、「弱き者を扶け、すべての人に対して寛容なれ。」テサ 5-14 (11月) など。
- * 10) 私立 S 小学校の“2017 年度 月の聖句”は 10 月分・翌 2 月分とも「ローマの信徒への手紙」第 12 章からの言葉が用いられている。

- 10 月の聖句：「希望を持って喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。」
(「ローマの信徒への手紙」第 12 章 12 節)
- 2 月の聖句：「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」
(「ローマの信徒への手紙」第 12 章 15 節)

そこで後者2月分については前年度“2016年度 月の聖句”の2月分「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。」(「詩編」第46篇2節)に差し替えた。なるべく多くの文語表現と出会う機会を設けるためである。

[付記]

小稿を成すにあたって宮崎隆一校長先生から貴重な資料等をご提供いただきました。また『文語訳聖書』の訓み方について学内の先生方から様々にご教唆いただきました。心より御礼を申し上げます。

西南学院大学人間科学部児童教育学科